氏　　名	周　英實
学 位 の 種 類	博士（行動科学）
学 位 記 番 号	博甲第　8215　号
学位授与年月	平成　29 年　3 月　24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	韓国語話者児童の読み方略における発達的変化について

主　　査	筑波大学教授	医学博士	宮本　信也
副　　査	筑波大学准教授	博士（学術）	山中　克夫
副　　査	筑波大学准教授	博士（医学）	太刀川 弘和
副　　査	熊本保健科学大学准教授	博士（文学）	水本　豪

論文の内容の要旨

周英實氏の博士学位論文は、韓国語話者児童の読み方略の発達的変化を検討したものである。著者は、韓国語話者の典型発達児童における読み方略の発達的変化を明らかにすることを目的に２つの研究を行い、韓国語の読み方略の発達において、語彙経路と非語彙経路の両方が関与していること、さらに語彙経路は小学１年生年代で大きく発達する可能性を示している。その要旨は以下のとおりである。

第一研究：小学１年生から２年生にかけての縦断研究

（対象と方法）

対象は、韓国語を母国語とし、知的障害がないと判断されている小学 2 年生児童 85 名である。対象児は、小学１年生時に「読み書きスクリーニング検査」を他研究者により実施されている。

対象児に対して、正確性を評価する課題と流暢性を評価する課題から成る音読課題を実施している。正確性は正しく音読できた正答数で、流暢性は音読所要時間で、それぞれ評価している。

（結果）

本研究により、著者は以下の結果を得ている。

①小学１年生時から２年生時にかけて実在語と非語の両者の正答数が有意に増加

②実在語と非語とでは、実在語の正答数の方が有意に増加

③音読所要時間は、どちらの学年でも実在語の方が非語よりも有意に短い

④実在語と非語では、どちらも、小学 2 年生時の方が 1 年生時よりも音読所要時間は有意に短い

⑤音読所要時間の変化は、非語の方が大きい

（考察）

小学 1 年生時に比べ 2 年生時において実在語で音読の正確性および流暢性が有意に向上していたことから、著者は、1 年生時から 2 年生時にかけて語彙経路が発達し、語彙的処理を活用した読み処理がより効果的に行われるようになっていることが推測されるとしている。一方、流暢性の向上度合いは非語の方が大きかったことから、文字素から音素へ 1 文字ずつ連続的に変換する非語彙経路の処理速度も向上している可能性も指摘している。

第二研究：就学前から小学 3 年生までを対象とした横断研究

（対象と方法）

対象は、韓国語を母国語とする年長児 19 名、小学 1 年生の夏 12 名・冬 18 名、小学 2 年生 13 名、小学 3 年生 13 名の計 75 名で、全例、発達の遅れはないと判断されている。

対象児に、実在語と非語の 2 条件及び音節数の異なる 2 条件の刺激語から成る音読課題を実施している。語彙性と文字長の効果評価の指標としては、正答率と音読潜時を用いている。

（結果）

本研究により、著者は以下の結果を得ている。

①どの学年においても、非語よりも実在語で正答率が有意に高い

②実在語・非語とも、学年が上がるにつれて正答率が有意に増加し、特に年長児から小学 1 年生にかけて正答率が著しく上昇

③どの学年においても、文字長にかかわらず非語よりも実在語で音読潜時が有意に短い

④実在語では、年長児、小学 1 年生の冬、3 年生において、短音節語で音読潜時が有意に短い

⑤非語では、どの学年でも短音節語で音読潜時が有意に短い

（考察）

著者は、学年による正答率の有意な上昇は年長児から小学 3 年生まで語彙経路が発達していくことを示していると推測している。音読潜時の結果からは、非語彙的な処理過程が音読に関与していること、及び、非語彙的な処理過程も学年とともに発達すると考察している。

また、小学 1 年生において正答率の上昇が大きかったことや、小学 1 年生の夏で実在語において文字長効果が認められなかったことなどから、小学 1 年生で語彙経路が大きく発達している可能性も指摘している。著者は、日本語仮名とイタリア語に関して小学 1 年生と 2 年生の間で非語彙的処理から語彙的処理へと読み方略の変化があったとする報告を引用し、今回の結果は韓国語の読み方略の発達的変化が他言語よりも早い可能性をも示していると考察している。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、韓国語を母国語とする児童における韓国語の読み方略の発達的変化を検討したものである。結果、韓国語の読みに関して、語彙経路と非語彙経路の両方が関与しており、かつ、両経路の処理過程とも年長児年代から小学 3 年生年代にかけて発達することが示された。また、語彙経路の処理過程は、小学 1 年生時点で大きく発達することも明らかにされ、本研究の目的に沿った成果が得られたと判断される。

一方、本論文における第二研究は横断研究であり、厳密な意味では、発達経過を検討したものとは言えない部分がある。しかし、発達経過の研究においては、同一対象を長期間対象とする検討の前に、異なる年代を対象として発達経過の概要を検討することは一般的に行われる研究デザインである。周英實氏自身、今回の結果を受けて縦断研究を行う予定を検討中であり、この点はよく理解されており、本論文が従来の研究と比べて研究デザイン的に特に問題とされるものではない。

なお、本論文の結果自体は、他言語ですでに同様の報告が得られているもので、その意味では研究デザインとして追試的な要素も考えられる研究である。しかし、異なる言語体系における研究は、たとえ追試的なデザインになったとしても、一度は実施されなければならないものであり、実施して初めて同じ結果と言えるものであること、さらに、韓国語を対象とした研究としては初めてのものであることなどから、この点により本論文の価値が下がるものではない。

本論文は、韓国語の読み方略の発達過程を初めて明かにした点は大きく評価されるものであり、韓国語の音読研究に際して今後参照されることが多い論文となることが予測され、本論文の意義には大きいものがあると判断される。

平成 29 年 1 月 16 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（行動科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。